

「土曜日を博士が面會日にして居られることは豫てから承知して居つたが、けふまで訪ねる機會を得なかつた。昨日嘯風が博士に逢うたところ、僕の近狀を尋ねられ、明日は一緒に來るやうにとのことであつたから是非行けどいふ。嘯風について夜の九時頃その宅を訪ぶ。學者はこの國でもあまり物質的には惠まれぬと見え、質素簡朴の住居なり。博士と令夫人とは次々に集り来る客に愛想よく應接せらる。男客には亞細亞協會にて顔見知りのメイエー氏を始め、アラビヤ學者のフエルラン氏、ギメー博物館のハッカソ氏、露西亞のエリセーエフ氏、印度のダルマ・パラ氏、ナグ氏外一人その他數氏、女客も五六人あり。日本人は嘯風と僕となり。博士は僕をその書齋に導き、藏書を示さる。嘗て余の校合したる大唐西域記の大書より寄贈せられたるを示し、この書は常に坐右を放さずなど如才無き應接なり。案内せられたる三室の書架は、コルディエ氏の本箱の立派さとは比較にならねど、藏書は内外博きに亘り、和漢の書も縮藏以下梵語・佛教に關する主要なるものは備はれるが如し。女客は令夫人を助け、茶よ菓子よビールよザンドウイッチよと、來客への給仕に任す。主客の話は多く佛教や梵語に關するものなりしが、ナグ氏はガンドーラ美術に於ける希臘要素の然く大ならざるべきを熱心に論じたり。明日僕の寓居を訪ふべしといへり。諸國の學徒この間に渾然融和し、小研究會小社交機關の目的を達成せり。我が國でも偉い先生達が、かゝる面會日を設くることを考ふべきなり。寓に歸れば十一時に近し」

と走り書きしてある。近く伊太利旅行に上る自分の爲にローマに在る博士の教へ子なるフォルミキ教授に紹介狀を書くといはれたので、次の土曜日には約束に従つて午後三時頃に重ねてお宅を訪うた。この日も男女十數人の客が集つて居つたが、肝腎の御主人がまだ歸つて來られない。令夫人が氣を揉まるが致方もない。自分の隣に腰をか